この素晴らしい世界にアンチ・スカルガール兵を！

真庭猟犬

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

桜宮茜渦はニューメリディアンで自身の能力を使い、【スカルハート】と【ダブル】の【存在・概念】を取り込んだ後、消滅した。

だが、目覚める筈のない彼が目覚めた場所は【このすば】の死後の世界だった。

とある動画でスカルガールズ２ｎｄアンコールを見てはまり、その要素を持ったオリキャラを【このすば】に入れてみました。

目次

始まり（主人公設定あり）――――　1
アンチ・スカルガール兵に冒険者の職業を！――――――　8
異世界転生二日目――――――　14
とある廃屋の冒険者達　1F～2F　21
とある廃屋の冒険者達　3F―A　30

始まり（主人公設定あり）

「桜宮茜渦（さくらみやせんか）さん、ようこそ死後の世界へ。私の名はアクア。あなたはつい先ほど、人生の終わりを迎えました」

真っ白な部屋、事務机と椅子、そして目の前にいる水色の髪の少女―アクア。この状況とそこに到るまでの経路が走馬灯の如く頭の中を駆けるような感覚を受けていると、本能が現実逃避したかったのかこんな言葉を叫んでいた。

「……Ｗｈａｔ　ｈａｐｐｅｎｄ!?」

「ええ!?　第一声がそれ!?」

「いやいやいやいや、スカルハートごと消滅したはずなのに何で死後の世界にいんの俺!?」

正確には並行世界のスカルガールズの世界で死んだんだけど、何で【このすば】の世界に移転してんの!?

「あー、もうわけわからん。完全に消滅すると思ってたからあんなこと言ったのに思いっきり滑ったじゃん」
「一部臭いセリフ言ったわよね」
「うおおおおおお言うなあああああ!!」

メッチャ恥ずかしいんだよ!

「それはそうと、あなた…。ゲームは好きかしら?」
「まあ、な。あと、いい加減そのニヤニヤ顔を止めないと潰スゾ」
「待って待って!　私が悪かったからその目を元の色に戻して右手で光ってる何かを消して!!」
「チッ!　部屋の一部を真っ赤にしてやりたかったな」
「すごい物騒!」
「これ位スカルガールが起こす厄災に比べりゃ児戯に等しいぜ。それと、ゲーム自体は好きだな。今じゃ少し懐かしいけどよ」
「それならこんなのはどうかしら?」

アクアが話したのは過去に読んだ原作の一部と同じものだった。個人的には神からの贈り物をどうするかが悩みだ。正直に言ってスカルハートの力が別のものとなって俺の力・能力へと変化しているから武器や魔法を選んでも余り使い道がない。どうするかな。

「ねー。まだなのー？」
「喧しい！　魔法や武器は取り込んだスカルハートの力や俺自身の能力で事足りてるんだから何を選ぶべきか考えてんだよ！」
「ヒッ、ご、ごめんなさい。あと、髪と瞳の色を変えながら吼えないでくださいお願いします！」
「わかったわかった。……なあ」
「ｈａｉ!!　なんでございませうか？」
「（何故にブロント語と某不幸男子高校生の返事が混じったやつなんだ？）イメージ通りに変化できる服装ってのはあるか？」
「あ、ありますが…」
「じゃあ、それで。あと変な敬語は止めろ」

服にちょっとした細工を施せば破れたり燃え尽きてしまったりしても元通りになるからな。あと元通りにできるなら返り血とか気にしないで済むし。

「わかったわ。服装は向こうの世界に送る際に今着ている服を希望通りのものに変えるから。あと、今から魔方陣を出すからその中央から出ない様にして」

「了解だ」

返事をすると、足元に俺がいる場所を中心とした魔方陣が展開される。そして、重力を無視するかのように浮遊していく。上を見上げると、ゲートらしきものが構成されていた。

「一つ聞くが、転移したらいきなり空中でした、なんてオチはないよな？　あれ、２度としたくないんだが…」

「大丈夫よ。転移先は街中だから地面に叩きつけらる事はないわ。というか、あなたそういう経験していたのね…」

「……あの時は本気で死を覚悟した」

もし、ビックバンドがいなかったら確実にあの世逝きかスカルガールの僕かだったな……。トラウマになりかけたもんだし。

「ご愁傷様…。こほん。さあ勇者よ！　願わくば数多の勇者候補達の中から、貴女が魔王を打ち倒すことを祈っています！　さすれば神々からの贈り物として、どんな願いでも叶えてさしあげましょう！」

願いねぇ…。ぶっちゃけ、体内もとい魂と融合したスカルハートの能力で幾つかの奇跡は起こせるが、そういうのは野暮だな。

【主人公設定】
名前…桜宮茜渦
性別…男
年齢…１７

身長：１６４ｃｍ
容姿：黒髪黒目。髪型は【犬走椛】の犬耳ありｖｅｒ．と瓜二つ（犬耳部分は髪の毛）。顔立ちはやや童顔かつ多少女子っぽい。
好きなもの：アニメ／ゲーム／ジャンクフード／ラボ８のメンバー達／ユーワンのレストラン／炭酸飲料（特にコーラとドクペ）／程々の刺激／平和な日常／ちょっとした言葉のぶつけ合い／軽いドッキリ／独自の音楽を演奏すること／歌と踊り／ガレオス・メディチ
嫌いなもの：ダブル／メディチマフィア／ブレイン・ドレイン／権威を楯に好き勝手に振舞う人間／ブラックダリア／傲慢すぎる人間／無関係の人間を巻き込むこと／自身の能力に頼りきること／度が過ぎた個人の駄目ッぷり
能力：メアリー・スーフロムアザトース／スカルスピリット／コピー
過去設定：元々は普通の男子高校生だったが、【スカルガールズ】の世界で（１３歳へと若返りして）トリップした。（←トリップ時は原作から４年前）
メディチ家の恥扱いされていた【ガレオス・メディチ】に拾われ、彼を通してラボ８に匿われた。その時に自身に備わった能力を自覚する。【スカルガールズ】の世界での日常はラボ８にいるか、小遣い稼ぎにユーワンのレストランでバイトしているかが殆どだった。マリーとの決戦後、スカルハート・ダブルの【存在・概念】を取り込み、同じ

場所にいたピーコック達に別れの言葉を告げた後に消滅したが、何故か【この素晴らしい世界に祝福を!】の死後の世界にいた。

その他

・自身の能力によってどんな環境でも適応でき、尚且つ魂の汚染を受付ない体質に改造しており、スカルハートの歪んだ力の影響を受け付けない。

・ステータスは幸運の数値がやや高めと知力が平均の倍の数値以外は規格外レベル。

・戦闘スタイルは状況や相手によって変えるので決まった型はない。

・イライラしている時や怒り状態では髪と瞳の色がスカルガールに似た色へとなる。

・性格はSっ気ありのお人よし。相手によっては敬語を使うこともある。

・【スカルガールズ】のプレイアブルキャラ+ラボ8の合成パラサイト所持者の戦闘スタイルや特徴、武器等は全て模倣しており、戦闘や依頼ではそれらを使うこともある。

・【スカルガールズ】の世界にトリップする前は孤児だった。

アンチ・スカルガール兵に冒険者の職業を！

「うん、異世界だ。まごうことなき異世界だ」

あの場所から移転した先は石造りの街だった。ニューメリディアンのように車やバイクが走っておらず、変わりに馬車が馬に引かれている。

「さーて、まずは情報収集だな。この世界は未知にありふれてるし、今までの常識が通用しないこともあり得るだろうし」

まあ、原作のと対して変わんないだろう。

「一応こんなものでいいか」

約1時間内でこの街にいる住民たちから聞いた情報を手元にあるメモ帳に書き、それを纏めて箇条書きで別のページに記した。この世界の常識は原作と同じだ。ただ、違うのは茶髪のメイド服に近い格好の女性がウィズに並んで有名な人物だということだ。茶髪＋メイド服のワードである人物が浮かんだが、そいつは死んだ上に容姿と年齢が合わない。多分違う人物だろう。

とりあえず、まず確保しておくべきは冒険者登録料と、寝床だ。食事は最悪モンスターを悪食すればいいだろう。あとで、能力を使って身体を強化しておくかな。毒とか病気とかへの耐性強化は大事だ。とんでもなくマズイ料理で危うく死に掛けたから二度とそういうのは経験したくない。

「あらよっと。これはここでこれはあっちだったな」
「おーい、兄ちゃん。注文していいかー？」
「オッケーですよー」

現在、金稼ぎのために飲食店でバイトをしていた。ユーワンさんが経営しているレス

トランでバイトをこなしていたのと、コピー＋練習で培った曲芸の動作を合わせた配膳でバイトをこなす以上に客寄せをしていた。店長（別の世界からきた地球人）は他の調理スタッフと共に料理を作り、客も客で料理に舌鼓を打ちつつ、俺の配膳に拍手をしていた。元々アクセルの街だけでなく王都からも客がくる有名店なので、来客自体は多かったが、俺が一日働いただけで客が増えたらしい。そのお陰か登録料だけでなく今日の夕飯と明日の朝食代が確保できた。

「いやぁ。今日はありがとう。お客さんもいつも以上に満足できたよ」
「働かせてもらうだけでも御の字ですよ。しかし、転生ではなくいつの間にか異世界へトリップしていたって珍しいですね。大抵は死んだ若者ばかりなのに」
「君も十分若者だよね？」
「本来なら２２だったんですがね」
「それでも若いよ。あ、これは今日の日当だよ。いつもよりお客さんと注文が多かったから幾らかボーナスを加えているからね」
「あざっす」

日当を貰い移動する。日当が入った袋の中身は１２０００エリス入っており、登録料

を除いても夕飯と風呂、朝食の料金に支払いにも贅沢しなければ十分な余裕がある。今日は冒険者登録して夕飯の後馬小屋…の屋根で寝よう。姿とか変えれるし、寝る時はモフモフした動物をベースにしたもので寝るか。

「すいません。冒険者登録をしたいのですが…」

ギルドに着き、冒険者登録をするために受付に向かう。相手の受付は緑の髪でおさげに眼鏡と一部の人間なら幾らかテンションが上がりそうな女性だ。

「冒険者登録ですね。登録手数料として一人一千エリスの支払いとなりますが、よろしいでしょうか?」

「はい。これでいいですか?」

袋から金貨二枚を取り出して渡す。この世界では銅貨が１０エリス、銀貨が１００エリス、金貨が５００エリスとなってる。一万円札と1円玉に5円玉はあたる貨幣は見た

ことはない。

「では、冒険者になりたいと仰るのですから冒険者についてはある程度理解していると思いますが、簡単な説明をさせていただきます。まず、冒険者とは街の外に生息するモンスター……。人に害を与えるモノの討伐を請け負う人の事です。討伐以外にも人捜しやダンジョンの捜索などの依頼を受けることができるので、モンスターと戦うことができる何でも屋と思ってください。冒険者は各職業というものがあり、それぞれ得意とするものが違います」

その後、冒険者カードとレベルの説明を聞き、渡された書類に自分の身長、体重、年齢、身体的特徴を書いていく。書いた後、カードを水晶がはめ込まれた機械の下に置き、水晶に手をかざす。水晶が光りだすと機械が動き、カードにステータスが刻まれていく。機械が止まると受付のお姉さんがカードを取り出した。

「はい、ありがとうございます。サクラミヤ　センカさんですね。ええと、幸運と知力を除いて過去最高の数値です。知力も魔法使いタイプの上級職の適正値を超えています。これならほとんどの上級職に初めからなることができますよ」

「一風変わった上級職ってありますか？」

「それなら、エンチャーターやアルケミストですね。エンチャーターは道具や武器等無機物、無生物に魔力を込めることができる職業です。アルケミストは物質の構成や形を変えて別の物に作り変える技術とそれに伴う理論体系を扱う学問による技術を使う技術です。どちらもあまり見かけない職業ですが…」

アルケミストって自分の手書きキャラが牛のあの人の作品が元じゃないのか？　ｗ○○ｉで見た覚えがあるし。

「それじゃあ、エンチャーターで」

「ではエンチャーターで登録いたします。冒険者ギルドへようこそ、サクラミヤ　センカさん。スタッフ一同、今後の活動を期待しています」

受付のお姉さんが柔らかい笑みを浮かべる。歳が殆ど近いのもあるだろうが、その笑みに思わず魅了されそうだった。

異世界転生二日目

昨日冒険者登録を済ませ、冒険者になった。そして、登録日から翌日。初心者向けのクエストであるジャイアントトード5体を3日以内に討伐するために平原地帯へと来ていた。エンチャーター専用スキルを試すのとスカルハートとダブルを融合させた身体の軽い確認のためには丁度いいので朝食を済ませてから少しした後で受けたのだ。

「さーて、サンドバックはっと…、あ、いた」

視界を遮るものが全く無いので軽く見渡すと呑気に跳ねている巨大なカエル―ジャイアントトードを見つけた。このジャイアントトードは繁殖期になると子を増やすための栄養と体力を付けるために動きが活発となる。毎年繁殖期には人里から山羊が丸呑みにされたり、農家の人や子供が行方不明となる被害が出ているので冒険者へ討伐依頼を出すほどに危険視されているのだ。普通は金属装備があれば食われることはないが、現在の俺の服装は薄茶色のコート。コートの下は長袖のシャツとズボンと金属がベルトの金具だけの普通に食われやすい格好である。

ぶっちゃけた話、自前の能力＋冒険者スキルだけで攻撃も防御もソロで可能なのと、今回行うのはあくまで軽い確認だけなので使い慣れていない装備を身につけるのは悪手だ。

「さてさてスキルの検証と肩慣らしといきますか」

「えっと、魔法の属性の名がついたエンチャントは武器や生身でもできる。一度付加したエンチャントはいつでも消すのが可能。音楽や踊り等は精神系とバフデバフのみ、と。エンチャータースキルで分かったのはこれぐらいか。あと、能力でコピーしたバトルスタイル等は問題なしだな」

２０体のジャイアントトードの屍と用意しておいたメモ帳に書かれた箇条書きの文を見ながら先程の結果を口にする。アンチ・スカルガール兵として活動していた時と比べて劣っている部分はなく、むしろ強化できているとこだな。

「さてと、倉庫の鍵を開けて収納するか」

ポケットから金色の鍵を取り出し、錠前を開ける仕草をして空間を造る。これはエンチャントとコピーした技等の検証の副産物である特殊な倉庫で、持っている鍵はその倉庫の開閉（もしくは空間生成）に必要なものだ。他にも色々できたが今は割愛する。

倉庫自体は複数創れる＋時間を止めたり生ものの冷凍・解凍ができるのに加え、大きさも自在なので余裕があるので次々とジャイアントトードを倉庫へといれていく。討伐数自体は冒険者カードに自動で記録されていくから今のような行為をしても怒られることはない。

「ギルドに戻ったら解体の仕方と調理法を聞くか。原作だと唐揚げくらいしか料理なかったし、他の料理があったらそれらを作るのもありだし」

肉自体は少し硬いだけで味は淡白かつサッパリしてるらしいし、動画で見たアライとか試してみるか。

「はい、確かに。ジャイアントトードを三日以内に五匹討伐。クエストの完了を確認しました。お疲れ様です」
「あの、ジャイアントトードの解体って見れますか？」
「ジャイアントトードの解体を、ですか？」
「クエストで指定された数以上を倒したのと倒したもの全部を特殊な倉庫に入れてるんで自分で調理してみたいと思ったので」
「そうですね…私一人の独断ではできないので上司に話をしてきますので少々お待ちください」

そう言って受付のお姉さんが奥へと消えていき、数分経った頃に戻ってきた。

「お待たせしました。今回討伐したジャイアントトードを出してもらえるなら解体場での見学を許可するとのことです」
「分かりました。いつでも取り出せますので案内をお願いします」

受付のお姉さんに案内されて着いた場所は体育館並の広さがある石造りの大部屋

だった。そこでは幾つかのグループ（7～10人で1グループ）がそれぞれを解体を行っている。初心者でも討伐できるジャイアントトードが多いが、鹿っぽいモンスターや狸っぽいモンスターも解体されている。

「……見学者？」
「あ、はい」

近づいてきたのはやや小柄な女性だ。簡素なシャツとズボン、頭にバンダナを巻き、大きめなエプロンを掛けているが、血抜きで付着したのかチラホラと血痕が目立つ。

「……私はこの解体場の責任者。名はレリーズ」
「桜宮茜渦です」
「……ん。それじゃあ、ジャイアントトードを出して。解体を教える」
「了解です」

ジャイアントトードを入れた倉庫を出し、中からジャイアントトード1体を取り出す。適当に引っ張り出したそれは頭部がない。検証の際に【ビースト・オブ・ゲヘナ】を

模した技が頭部のみを食い千切ったせいだ。

「……頭部がない」

「あー。スキル等の検証の際に頭部のみを消したやつです」

「……頭を切り落とす手間が省けた」

カエルの解剖を細かく文字にするのは一部の人には吐き気を催してしまうかもしれないのでカットします。詳しい描写を知りたいかたはネット等での検索をお願いしますｂｙ作者

「まさか異世界で日本最古のカレーに近いカレーと蛙のアライをつくるとはな…」

現在俺はギルドにある酒場の調理場にいる。理由は大量に生産されたジャイアントードの肉を消費することでどうしようかと悩んだ際、蛙入りのカレーや動画でみたカエルのアライのことををポツリと呟いたら食い意地の張った職員が聞きつけ、あれよこれよと話が進み、何故か俺が作ることになった。ニューメリディアンにいた時でも色々と料理を大量に作る時が何度かあったので慣れているが、こんな状況になるとは思わな

かった。

「とりあえずカレーの定番の具材はあるし、お湯や水は初期魔法でやるか」

まずはアライで、その後はカレーだな。

「ちゃんと並んでくださいよー！　暴動起こしたら二度と食べさせないですよー！」
「くそ！　出遅れた！」
「大盛りで頂戴！」

ジャイアントトードのアライとカレーは人気だった。鍋の中身が空っぽになったあと、ギルドスタッフや冒険者、酒飲み好きの常連のお願いでジャイアントトード肉のカレーは不定期販売のメニューとなった。

とある廃屋の冒険者達　1F～2F

この異世界に転生し、冒険者となって半月が経った。現在、俺は身体をバラバラにされていながらも生きていた。

「仕留めたと思った？　残念、死んでないんだよな。【フィフス・オブ・ディスメンバー】！」

「ギャ…ッ」

空中に浮いた頭部目掛けて四肢と胴体が血を噴出しながら飛来し、モンスター（ワータイガーをベースに蛇と蟷螂・蜘蛛の要素を合わせたようなもの）を巻き込んで元の人の体へと戻る。モンスターは元通りになる時に血によってできた大きな猫の形をした刃と爪による斬撃によってさっきまでの俺と同じ状態になって絶命した。ナディアの不死身とそれを活かした戦法を覚えておいてよかったと思える。

「さーて、これで13体目。ただの調査依頼だったはずなのに、どうしてこう合成生物ば

かり相手にしているんだ？」

　元々はアクセルの街から遠く離れた場所に突如現れた廃屋（大きさは大型病院並みの屋敷）の調査だったが、廃屋周辺にはおぞましい姿の巨大な蟲や飛行するアンデット、廃屋の中には人間に他の生物を合成させたような何かが徘徊しており、こっちを見つけると直ぐ襲い掛かってくる。まるで人を餌として見ているようだ。

「今までの奴等もそうだが、この廃屋自体も不気味だな」

　やけに赤黒い上に錆特有の臭いが鼻を衝く。まるで【サイレントヒル】の裏世界に迷いこんだ気分だ。正直言って【スカルガールズ】の世界にいる原作キャラや過去の悲劇で慣れていた身であっても不快な気分になる。

「チャッチャと終わらせよう。こんな気味悪いとこに長くいたら頭が可笑しくなって死にそうだ」

「あーウザイ！　どんだけ蟲型のモンスターがいるんだよ!?」

イラつき混じりの叫びが大きめの部屋中に響く。２階を調査している間、やたらとムカデやハエ、Ｇ等を巨大化させたモンスターが何度も襲い掛かってきた。数が多い上に廊下でも個室でも集団でくるし、無駄に素早いのでウンザリする。

「今分かるのはこの廃屋自体が異世界、しかも裏世界に準ずるものだけか」
「それだけではないわ。センカ」
「誰だ！」

背後からの声に反応して振り向くと、アクセルの街で聞いたメイド服に近い格好の女性だった。

「ニューメリディアンで貴方と殺し合いをした者よ」
「お前…。もしかしてマリーなのか!?」
「ええ。まさかあなたもここに転生するなんてね」

「それは俺も思った。つうか、なんでマリーが年上なんだ？　ニューメリディアンで殺し合いした時はパトリシアと同じだっただろ？」
「時間のズレ、と言ったところでしょ？　私が転生した時間は今から約２２年も前だったから」
「それならまあ、納得がいくな。そういや、何でマリーがここにいるんだ？」

依頼の紙は俺が受託した際に掲示板から外したんだが…。

「あるギルド職員が胸騒ぎがするって私に依頼してきたの。その人の勘は下手な占い師より信頼できる人間だから受けてきたわけ」
「なるほどなぁ。で、マリーの冒険者としての職はなんだ？」
「アークウィザードよ」
「それって後衛職だよな？　ソロだと、詠唱に時間を掛けたらアウトじゃないか？」
「体技ができるから平気よ。それと、私は一人で来たわけではないわ」
「？」
「姐さーん。速いでふぎゃ！」
「…誰？」

マリーが来た時とは別の声色の疑問が自然と出た。部屋に入ってすぐに転んだのは黒髪の女子だった。いかにも中世ヨーロッパに似た世界を舞台にした魔術師が着るような赤色のフード着きローブを着ている。

少女を見てマリーがため息を吐くと、それが聞こえたのか涙目で起き上がった。瞳の色がルビーのような赤色だったので紅魔族だろう。

「酷いですよ姐さん！　そりゃウチはドジ踏んだりしますが、そんなあからさまに呆れたって言わんばかりのため息を吐かれたら精神的にくるものあるんですけど!!」

「……この子はねるみん。紅魔族でも冒険者でも珍しいサモナーよ」

「スルー!?」

「なるほど。出落ち担当か」

「初対面に酷い言葉の刃!?　てか犬っぽいよこの人！」

「言っておくが俺は男だからな」

「ウソーーーン」

紅魔族＝中二病気味なのに、こいつは何かしらのネタが多そうだな。さっきのはなん

か震えると【でぶでぶ】と効果音が出る同人作家っぽいニュアンスだったし。

「で、話しを戻すがマリーは何か気付いたのか？」

「気付いたのは私じゃなくてねるみんよ」

「ウチは昔っからイドの怪物や残留思念とかを見たり聞いたりすることができるんです。ですからこの屋敷に残っている残留思念を見聞きしましたが、もうエグイの一言につきます」

そう話すねるみんの顔色は少し青く、若干引きつってる。即刻忘れたいほどのものだろう。だが、この屋敷が何なのか情報が少しでほしいので我慢してもらうしかない。

「その残留思念ってのはなんだ？」

「……ああいうのを狂信者って言うんですね。やたらと我が主のために、とかもっと贄を、多くの捧げ物を、悲鳴を、苦痛を、とか何かを信仰していた人の異常な信仰心と狂った感情混じりの声と……犠牲者の「ＯＫ．流石に俺が悪かった」…お気遣いどうもです」

まさかあのゴミ屑共以下の輩がいたとはな。けど分かったことがある。この屋敷は

小さな異世界で、元々はどこかのパラレルワールドの教団の隠れ家か所有物だったんだろう。

「ここがどんな場所か察したのかしら？」
「ああ。あのメディチがマシかどうか分からんが、外道共の活動拠点だってのはな」
「え？　それってもしかして…」
「ねるみん、もう後戻りはできないわ」
「これは俺独自の憶測だが…」

【茜渦説明中】

「あばっ…あばばばばばばばば…！」
「……」

憶測としてサイレントヒルの教団みたいな組織のこと、ねるみんが聞いたものから想像した活動内容、犠牲者達の末路等を話した結果、ねるみんは白目を剥いて口から泡を噴出し、マリーは寡黙な表情で憶測を聞きながらも瞳に憤怒の感情を宿らせた。あくま

で憶測であって外れた方が良いんだが、その可能性は皆無だろう。二人もそのことに考えが至った、至ってしまった故の態度だろう。

「もし、ねるみんが聞いてたものの成れの果てがまだ存在するなら、俺達がとる行動はその存在を殺してこの廃屋からでるか、ここで死ぬかの二択しか残っていない。しかも、今までの化物どもがまだまだいるだろうな」

「むしろそれ以外の可能性があったら聞きたいわ」

「狂人だったものとか、グールとかはありえそうだな。もしくはこの世界に刻まれた負の思念から生み出されたクリーチャーとかな」

「な、何でそんなに冷静なんですか!?　こんな訳わかんない世界に閉じ込められてしまってるのに!?」

パニックに陥ったのか、ねるみんは青い顔で叫ぶ。こんな無茶苦茶で非現実的な状況をアッサリと受け入れている俺達が異端に見えてるのか、現実逃避をしたいのか、声色は恐怖に染まっている。

「こんな状況だからこそ冷静でいるんだよ。パニックに陥ったらそれこそ死にやすくな

る」

「それに私とセンカは異常な出来事を経験しているの。今私達が置かれている状況とは別の形で異常な出来事をね。だから冷静でいられるの」

「……ハア。何かギャーギャー騒いでたのがアホらしくなったです。このクエストが終わったら二人の過去を話してもらうですよ？」

「はいはい」「わかったわ」

優先すべきは生き残ることと敵の殲滅だ。やれやれ、調査どころじゃなくなっちまったな。

とある廃屋の冒険者達　３Ｆ―Ａ

「ギャアアアアアアアアアッ!!!???　なんですかアレなんですかアレェェェェェッ!!??」

ねるみんの絶叫が煩いがそれを気にせず走る。屋敷の探索もとい元凶潰しのために移動をしていた俺達だが、３Ｆに着いた直後に異常なまでに大きな鐘の音が響いた。鐘の音が途切れた頃には屋敷の廊下が下水道（色合いが緑かつ黴臭い）になり、目の前に巨大な口があったので逃げることにしたのだ。ちなみにねるみんは俺が背負っている。

「センカ！　あれはいったい何なの!?」

「グリーディーワームだ！　このエリアのボスか中ボスのどっちかだろうが、あんな大きさは実際始めてだ！」

追いかけてくる（這いずってくる）グリーディーワームの大きさは直径が３Ｍ。下水道自体は広さと高さは３Ｍを越えているが、その広さがグリーディーワームの大きさによる一種の恐怖に拍車を掛けていた。

「とにかく初級魔法でも中級魔法でもいい！　あの口内に攻撃を与え続けろ！　この先が行き止まりならほぼ死ぬぞ！」
「わかったわ！」
「わかったです。出でよ！　火の精霊イフリート！」
『オオオオッ！』

二人に指示を出すと即行動をしてくれた。俺も俺でスキルの応用で銃を取り出して撃ちまくっている。グリーディワームは攻撃を与え続けると口とその近くの部分を左右に振るだけで手ごたえがあまり感じられない。

「チッ、やっぱしぶといな」
「まずいです！　ここから約１ｋｍ先は行き止まりです！」
「マジか！　…マリー」
「なに？」
「何でもいい、音がこのフロア全体に響く魔法はあるか？」
「音だけなら【エコー・ボム】があるわ。けど、何故音なの？」

「説明は後だ。もしかしたらこの状況から逃げれるかもしれないんだ」
「……、その言葉に賭けるわ」
「ありがとな。ビースト・エンチャント・バット！」
「エコー・ボム！」

動物の特徴を一定時間の間だけ対象となった者が使用できるエンチャントを付与し、マリーが発動した魔法によって生み出された音の反響を受信する。音に意識を集中すると、後方の一部の音だけが音程が違うのに気付いた。

「ッ、抜け道を見つけた。走るぞ！」

攻撃をした直後に一気に走る。元々動きがそんなに速くないクリーチャーなので、距離と時間はある程度稼げた。【ビースト・エンチャント・サーペント】と【スキルアップ・エンチャント】、【アナライズ・エンチャント】で目を特殊なサーモグラフィにして抜け道を見つけたが――――

「チッ、やっぱ罅すら入ってないか……！」

「ど、どうするんですか!?」
「壊すしかないわね」
「そういう、こと！」

ねるみんを下ろした後、抜け道を塞いでいる壁を拳でぶん殴る。エンチャントを付与しているが、殴った右手を左右に振るほどに痛い。

「つぅ…、堅っ。どんだけ頑丈なんだ？」
「早くしなさい！　あいつが迫ってきてるわ！」
「センカさん。この壁って金属ですか？」
「？　ああ。目に付与させたエンチャントで分かったんだが…」
「一か八か、出でよ氷獣フィレクア！」

ねるみんが召喚したのは真っ白な狼。だが、大きさは狼を3倍にしたもので爪や毛の一部は氷となっている。

「あの壁に向かって交互にスキルを発動するです！」

ねるみんの指示で召喚された二体が炎と吹雪を壁に放った。アニメや漫画で使われた金属を脆くさせるアレを再現しているようだ。紅魔族は今までに転生した日本人の影響を受けているからその知識を覚えていたんだろう。

「急がないとマズイわ！　どんどん近づいてきてる！」

「ひえっ」

「交代だ！　ヘカトンケイルラッシュ!!」

ねるみんを後ろにやり、両の拳で壁を連打する。ある程度脆くなってるとはいえ、やはりまだ硬いし、痛い。手の痛覚が麻痺してきた頃には皮膚が裂けて出血しているのが僅かな間に見ることができたが、それを無視して連打を続ける。

「これで、どうだ！」

もう開くのもままならない右手に無理矢理体重を乗せて壁を殴ると、殴った場所を中心とした穴が開いた。大きさは一番身長が高いマリーが立ったままでも通れそうだ。

「よし、逃げるぞ！」

気付けば後１０ｍまでに距離を縮められていたため急いで穴を通る。通り抜けた先は今までの赤黒い部屋ではなく、やや古ぼけた洋室だった。

「……脱出成功だな」

「ええ」

「ですね」

床に座り、息を吐く。疲労感はあるが、両手には疲労どころか痛覚を含めた感覚全てが感じられなかった。マリーは冷や汗をハンカチで拭い、ねるみんはゼーゼーと疲労による荒い呼吸をしている。俺も俺で今から行う拷問染みた治療をしなければならない。……できればやりたくないが。

「センカさん。何しようとしてるんですか？」

「両手の回復だ。さすがにこのままじゃこの先生き残れるか不安だし、なにより攻撃手

段が限られるからな」
「それならちょうどいい盟友がいますので、彼女に頼むのです」

そう言ってねるみんは聞いたことのない言葉で詠唱を始めた。召喚術は二回しか見ていないが、本来はこういった詠唱が必要なのか？

「彼女が行っているのは異世界で国の象徴とされる召喚獣の力の一端を使う術よ。今使おうとしているのはラファエルね」
「その召喚獣の名と国は心当たりがあるんだが…」

昔にサービス終了したゲームの世界がここと召喚術で繋がってるって想像できなかった。マリーは俺の言葉に下水道でのやりとりを思い出したのか、少しジト目で俺を見ていた。

「またあなたの過去話関連なの？」
「言っておくが、召喚獣と国自体は俺がいた世界の娯楽の一つの設定だからな。それに俺が知っているのは容姿や国の住人とかの設定だけだ」

「フル・ヒール！」

ジト目のマリーに言葉を返した後、詠唱が終わったのかねるみんが治癒魔法を発動した。ボロボロだった両手は元に戻り、両手を握ったり開いたりしても痛みが襲ってくることもなく、感覚が戻っていた。

「サンキューねるみん。おかげで助かった」

「それはどうもです。しかし、毎度毎度召喚獣の力の一端は結構魔力を持っていかれるです」

ねるみんは「うあー」と上を向きながら情けない声を出す。原作のゲームでは召喚者はバトル中に1体かつ1回しか召喚できていないが、この世界だと短時間で上級か中級魔法を数回発動させるのに匹敵するのか？

「…しっかし、この部屋は何か奇妙だな。クリーチャー共の気配はないし、部屋自体は若干埃臭いがゲームで言う所のセーフポイントっぽいな」

「ゲーム、ですか？」

「コンピュータゲームっつう機械で処理される娯楽だな。それもこの件が終わった後に説明するさ」
「まあ、いいですが」
『おやおや。生きている人間がこの部屋へ来るなんて珍しい事がありますね』
「え〝…」
「誰だ」
「返答しだいでは、分かってるわね？」

突然の第三者の声にねるみんは固まり、俺とマリーは敵意と殺気を出しながら構えた。

『敵意と殺意をむき出しにしないでください。私は一部屋分の広さの守りの結界を張る以外は何もできない地縛霊ですよ』

声の主は霊体となった細身の成人男性だった。見た目は２０代後半だろう。この世界に長い間閉じ込められていただろうか、俺達の殺気を受けても苦笑で済ましている。

「で、その地縛霊が何の用だ？」
『純粋に生きている人間と話がしたいだけですよ。あ、その目で嘘かどうか確かめながら聞くのは止めてください。私はクリーチャーが入らないように結界を張るしかできなくなってますから』
「余り時間は割けたくないんだがな。こっちは元凶をぶっ潰すために移動と殲滅を行ってるんだ」
『なんと。あの者達の成れの果てを潰す、と』
「あなたの被害者側かしら？」
『都合のいい駒扱いされていたものですよ。私は』
「……まず聞かなきゃならないことができたな」

　この地縛霊、何かしらの情報を抱えてる筈だ。記憶している情報を聞き出す必要がありそうだ。俺の視線の意図に気付いたらしい地縛霊はやれやれと首を左右に振った。
『いいでしょう。少しでも生前の罪滅ぼしになるならば幾らでも話します』
「じゃあ、まずは――――」

この屋敷と所有していた組織を聴かせてもらうぞ。